
散華

天ヶ森雀

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

散華

【Nコード】

N3332R

【作者名】

天ヶ森雀

【あらすじ】

桜の舞い散る吉原の夜、花魁が馴染みの客にせがまれて語った囁きは、叶わぬ恋の物語だった。

TIINAMIより転載作品。

桜

「それは、叶わぬ恋でありんしたよ」

開け放たれた腰高窓からは、払っても払っても桜の花びらがいつの間にもやら舞い込んでくる。

吉原には数百本の桜が植えられ、花に酔う客を手招きしている。同時に離れの座敷からは賑やかなお囃子や嬌声が響き、春の宵は祝宴真つ盛りだ。

「煩いでしょう。お閉め致しんしょう」

袂を抑え、格子戸をずらそうとする白い手を、男の声が止めた。「かまわねえよ。桜なんてぱつと咲いて散ったら終いだ。この馬鹿騒ぎも両日中には終わるだろうよ」

そう言つて着流し姿で寝そべりながら、花びらが浮かんだ盃の中身をそれごと飲み干す。はだけた胸に雫が落ちた。あつさりとしたなりではあるが、その着物は絹だった。

「そうですか？ それじゃあ……」

紅い長襦袢姿の女は、伸ばした手を引っこめて、夜風に唄や笑いが流れて来るに任せる。

黒塗塀に囲まれた遊郭は、どんな夜も灯りが絶える事がない。賑やかな笛や三味線の音の隙間で、ひっそりと客と女郎が睦み合う。いつも一人でふらりと遊びに来る馴染みの客に、雲居太夫はしゃらんと三味線を掻き鳴らした。

男は無口だった。

酒も程々で乱れる事もなく、ただ暇を持て余した様に彼女を抱いては帰っていく。

その男が、その夜に限っておかしな事を言い出したのは、やはり桜が惑わせたのだろうか。

「何か話してくれないか？」

「何か、とは」

「何でもいいよ。寝物語に姐さんの声を聞いていただけだ」

太夫の声は高すぎず低すぎず、深みがあつて艶っぽい。男はその声を気に入っていた。

「全く、やぶからぼうでありんすねえ」

ふふふと笑つて、太夫は畳に散つた花びらに目をやった。

久方の 光のどけき春の日に しづこころなく 花の散るらむ

… ああ、あれは誰の詠んだ歌だつたらう。紀貫之…、いや友則だつたか。

「そう、多少辛気臭い話になるやもしれませんが…昔聞いた話をひとつ」

本当にあつた事かどうかとも分かりませんがねえ、と笑いながら、女は遠い目をして語り出した。

その娘はおちかといった。

幼い頃に親兄弟と死に別れ、とある商家に引き取られ、下働きをして暮らしていた。

朝から晩までこまねずみの様に働かされ、けれど不平不満を言う事もなく、ニコニコと大人しい娘だった。

そんな彼女が変わつたのは数えて十六くらいの頃だつたらうか。お使いに出た際、切れた下駄の鼻緒を、通りすがりの男にすげ替えてもらったのだと言う。

彼女からその事を聞き出した、同じ下働きをの女が「いい男だったかい？」とニヤニヤしながら聞くと、おちかはうなじまで真っ赤

に染めて俯いたのだった。

「奉公人ですからね、そんなに暇があるわけじゃあない。それなのに、その男とまた店の前でばったり。それからおちかは変わりました。内気でしたからね、たまの休みも女中部屋にこもって繕い物やなんかをしたのが、いそいそ出歩く様になつて。取り立てて美人と言う訳じゃあじゃなかったけど、それでも花が綻ぶ年頃ですよ。ぱあっと笑顔になれば、それだけで場が華やぐつてえもんです」

しゃらんと再び三味線を鳴らし、太夫は紅い目尻を下げて微笑んだ。

「男は浪人だと言つてました」

浪人とは言え、身なりはこざつぱりとして物腰も穏やかだ。三十路にはまだ遠いだろう。姿勢の良さと言葉使いに育ちの良さが窺える。笑うと目尻に皺が出来た。

世間知らずの小娘の事だ。一緒に道を歩くだけのぼせあがる。一目その姿を見ただけで、笑顔が満開になるまでには、あつという間だった。

小さな文を交わしあい、人目を避けた船宿で逢瀬を重ねる様になったのは、男女の自然な流れだろう。

しかし、おちかの幸せは長く続かなかった。

奉公先の商家に、ある夜押し込みが入ったのである。

幸い人死には出なかったが、金品や高価なものが盗まれた。

盗賊は捕まらなかったが、詮議の結果、夜中に通用口を開けたのがおちかだと分かった。

彼女は恋人が会いに来ると言われ、素直に心張りを外してしまつたのだ。

知らぬとは言え、盗賊の引き込みをさせられたおちかを、商家は許さなかった。

真面目に働いていた娘ゆえお咎めはなかったものの、着のみ着のみままで叩き出され、おちかは途方にくれた。

そもそも、何がどうしてこうなったのか、見当もつかなかった。

（あの人が盗人…？　押し込みの為に私に近付いたの…？）

頭では分かっていても心はついて行かぬ。

住むところも身寄りもないおちかが、苦界に身を沈めるのに、そう時間はかからなかった。

「…よくある話でございましょう？　世間知らずのおぼこい娘が、

男に利用され、捨てられたんですよ」

一抹の哀切を隠して忍び笑いながら、女は淡々と語り続ける。

落ちるところまで落ちたと言うべきか。

春をひさぎ、客をとる様になっても、おちかは愚痴をこぼす事なく仕事をこなした。無口さ故陰気な娘だと乱暴に扱う客もいたが、決して不平は漏らさなかった。

女郎部屋の仲間が気味悪げに尋ねる。

「本当はあんたを裏切った男が憎いんだろう？　いつそ恨み辛みをぶちまけちまえばいいじゃないか」

訊かれても、おちかは困った様に笑うだけだった。

確かに辛くないと言えば嘘になる。殴られるのは奉公先で慣れていたが、飯が食えない日が三日も続くと流石にきつい。

橋の下で筵にくるまっていた時は、足の指先がかじかんで眠れなかった。

しかし、脂臭い男の息や芋虫の様な身体をまさぐる指も、慣れてしまえば耐えられぬ事はなかった。

何より辛いのは、会えない事だ。会いたくて会いたくてたまらない人に会えない事だった。

あの人は今どこにいるんだろう。

どこで何をしているんだろう。

おちかの小さな胸に、身を擦る様な痛みが走る。

その痛みはどこから来るものか、おちかは何度も考える。

「私ねえ、あの人にもし会えたら…聞きたい事があるの」

ぽつりと漏らしたおちかの言葉に、女郎衆は呆れたように笑った。
「そりゃあいつばいいあるだろうさ。恨みつらみも幾月歳、全部ぶちまけてやりゃあいいよ。…まあ会えたらの話だけどね」

女達はしやしやらと明るい諦めの笑いをこぼす。

「そうよねえ」

おちかは相槌をうちながら、やはりひっそりと笑った。

そんなある日、彼女を訪ねて一人の侍がやってきた。

菅笠で顔を隠したその様は、身なりが良く目付きが鋭い。

客の振りをしたその侍は、部屋に入ると着物の懷から金子の包みをおちかに差し出した。

「我が主よりこれを」

ぽかんと口を開け、言葉が出ないおちかに、侍は正座したまま話し出す。

「実は」

さる御方から頼まれた。

その御方は国に帰れば役職につく高貴な身分であつたが、とある陰謀に巻き込まれ、家宝の品を騙し取られた。

その家宝はお殿様より直々に下賜されたものであり、何かあればお家断絶も免れない。その御方は陰謀を暴くと共に、奪われた品を奪還すべく、殿に願い出て単身探索の旅に出た。

お前が勤めていた商家の主は、あのお方と同郷で、陰謀の主と繋がっていたのだ。

彼のお方は隠密に事を運ぶ事が無理だと悟り、盗人を装って家宝を取り戻した。

「火急の知らせがあり、急ぎ国に戻られたのだが、長らくお前の事を気にしておった。これは僅かばかりだが詫びの印である」

おちかはますます息を飲んでだまりこむ。

陰謀？ お殿様？ お店の旦那様は悪いことに加担していたの？
確かに意地悪で冷たい方だったけど…

おちかの沈黙をどう受け取ったのか、侍は渋面を作って続けた。

「まことの名も国許もお前に明かす事は出来んが…元を正せば由緒正しきお家の方。離れてはいたが、国には妻子もいらっしやる。ようやく一緒に暮らす事が叶ったばかりじゃ。思うところもあるうが、あの方の事は一切忘れて」

言いながらぎよっとした。

一言もなかったおちかの頬を、つうつと涙が流れ落ちたのである。

「奥方様とお子様…？」

「そ、そうじゃ。だから」

諦めよ、と言う言葉は口の中であえなく溶けた。

恨み言を言われるのは覚悟していた。泣き喚くかもしれない、とも思っていた。

しかし、そのどちらでもなかった。

一滴の涙を拭いもせず、おちかは澄み切った笑顔を見せて、こう言った。

「それじゃあ…あの方は今、お幸せなんですね？」

夜話

「ふたごろのまつたくない、満開の桜の様な、そりゃあきれいな笑顔だったそうでありんす」

三味の音はもう鳴らない。

馬鹿騒ぎの宴会も終わったのか、お囃子の楽も止まっていた。

「おちかはそのお武家様にこう申し上げました。『今の言葉で充分です。それだけがずっと気がかりだったんです。どうぞこのお金は国許にお持ち帰りになって、あの方にこうお伝え下さい。ちかは元気で幸せにやっている。いらぬ氣遣いは無用にございます、と』」

おちかの笑顔に氣圧され、その侍は一旦宿に金子を持ち帰り、一晩目の前に眺めて思案しましたが、もう一度と翌日おちかを訪ねていった時にはおちかはもういやしませんでした。誰に聞いても遠くに言ったらしいとしか答えちゃくれません。胸の奥になにか重たいものをかかえ、お侍様は国許へお帰りになったそうですよ」

長い話を語り終えてホツとしたのか、太夫の顔は明るい。白い指先が膝元に散った花びらを数枚拾い、手に平から息を吹きかけて飛ばした。

淡い薄紅の花びらが、太夫の息を受けてちらちらと舞う。

「ねえ、旦那。これは叶わなかった恋の話でありんす。でもねえ、この話を聞いた時、何と言いましようか、あちきは」

舞う花びらに視線を向けて、しかし太夫が本当に見ていたのは何だったのか。

黒い双眸にちらりと紅い焰^ひが見えたような気がして、男はぞくりとその背筋を振るわせる。

「あちきは、おちかの全うした恋の潔さに…妬ましさを覚えんした」

言葉とは裏腹に、いとけない唇で女は笑った。

それは、春をひさぐ女にしか分からぬ通念であつたろうか。

光のどけき春など知らぬ。

女郎が生きてるのは夜の修羅と相場が決まっている。

しかし、散り急ぐ花のあでやかさは知っていた。

時折、苦界にあつて、恋の花を咲かせるものもいぬではない。その者達は驚くほど鮮やかな散り際を見せて皆いなくなった。

「あちきは…特に桜を見て綺麗と思ったことはありません。単に、春になれば咲き、散る花とだけ思っておりました。でも…この話を聞いてから、この桜の時期になるとおちかを思い出すんです。おかしゅうござんすね。おちかが死んだと決まったわけでもないのに」
子供のような笑みが、薄闇の中に溶ける。

黙って話を聞いていた男は、のっそり立ち上がると太夫の背後にまわり、背中から彼女を抱きしめた。

唇が白いうなじをつうとすべる。

「旦那、お休みになるんじゃないですか？」

「姐さんの話は、子守唄に聞くには色気がありすぎらあね」

意地悪く笑いながら八つ口から手を入れ、女の胸を揉みしだく。

「まったく…」

苦笑しながら太夫は抗わなかった。どんな気が立ったかは知らぬが、情に耽るには良い夜だろう。

女の柔肌を楽しみながら、男は心中溜息を吐く。

まったく、女ってのあ、なんて不可思議で恐ろしい生き物なんだろうな？

飯にも太夫にまで上り詰めた女が、恋に堕ちた娘を妬ましいと言
う。

叶わぬ恋と言いながら、その情の深さには恐れ入る。俺がその男
だったら、一目散に逃げ出しそうだがね。

そんな己の意気地なさを自嘲しながら、男は女を褥に組み伏せた。
紅い夜具の上にはやはり桜の花びらがちらちら落ちて、女の肌を
儚く見せている。

よもや太夫が当の娘では、とふと気付き、男は一瞬腰が引けるが、
女のはんなりした笑みに抗いきれずその身を沈めた。

浮世に舞い散る無限の花びらは、叶わぬ恋に溺れる女達の、淡い
写し絵だったかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3332r/>

散華

2011年4月27日14時25分発行